

主 題：旧約に見る神の救いのご計画Ⅱ：偉大なる大祭司イエス・キリスト
聖書箇所：出エジプト記 28章 & ヘブル人への手紙

出エジプト記の28章をお開きください。

今日は9月2日にさせていただいたメッセージのパートⅡということで、「旧約に見る神の救いのご計画」について、出エジプト記からイエス・キリスト＝大祭司ということで学んでいきたいと思ひます。

序論：

旧約聖書と新約聖書は密接な関係があります。私たちは旧約聖書を読む機会が少ないかもしれませんが、聖書を輪読されている方は旧約と新約を万遍なく読むということで、旧約を2章、新約を1章読むと恐らく1年で全部読み終わるということになるでしょう。旧約聖書があるから私たちは新約に書かれていることがよく理解できる、新約聖書を見て旧約に書かれていることがよく理解できると、聖書はこのような関係にある一冊の書物です。ですから、今日もまた、旧約を通して新約聖書に教えられていることを学んでいきたいと思ひます。

ローマ人への手紙1：2-3と15：4を見てください。「：2——この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、：3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、」、「15:4 昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」、前回のときにもこの箇所を見ました。「昔書かれたものは、」、旧約聖書のことですが、「すべて私たちに教えるために書かれたのです。」とはっきり記されています。「それは、」は書かれた目的です。「聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」と、私たちに希望を与えるために書かれたと言うのです。そして、ヨハネの福音書14：6にはこのように記されています。「イエスは彼に言われた。「わたくしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、イエスはこのように言われました。イエスが真理であり、また、書かれたみことばも真理です。この旧新約の二つを通して、私たちはイエス・キリストがどのようなお方であるかを今日学んでいきます。

前回話したとき、神がイスラエルの民に対して、ご自分が民と会われる場所として特別な建造物を造るようにと命じられたところを見ました。出エジプト25章でした。神は本当に事細かに、材料はこのようなものを、造る数量はどれだけ、そして、寸法はこの通りと細かいところまで指示されて、「わたしの言うとおりにそれを造れ」と言われました。イスラエルの民はそれに従ってそれぞれが自分の持っている物を神の前に持って来て材料としてささげ、そして、神が言われた幕屋ができました。神と民が会う場所です。そして、その幕屋の中に聖所と至聖所が造られたのです。ご記憶にある通り、聖所と至聖所の間には幕が張られてあって、それは人々が簡単に入ることができないためでした。幕屋の入り口は一つ、至聖所の入り口も一つ、その一つの入り口から入っていくことしか道はないのです。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と言われたイエスを私たちはそこで思い起こすことができるのです。イエス・キリストが十字架に架かって息を引き取られるときに、イエスは「すべて完了した」と言われ、神によって計画された救いの道がすべて完了したのです。イエスが十字架に架かれて、完全な神の小羊であるイエス・キリストがいけにえとしてささげられることによって完了した、そして、そのときにその隔ての幕は上から下まで真っ二つに裂けたと聖書は教えています。これが前回までの学びでした。旧約には多くの型があり、前回の幕屋と聖所、契約の箱を通して、イエスが神の子キリストであり、神の怒りをなだめるためのいけにえの小羊そのものであることを私たちは学んだのです。

このように場所が整えられたその後に、神は次に人をお選びになるのです。今回は、幕屋で神に仕える祭司を通して、神の救いのご計画を学び、イエス・キリストこそ真の大祭司であることを学びます。

☆祭司職の任命

I. 祭司任命についての神のご命令 28：1、3

(1) アロンと四人の息子を「祭司としてわたしに仕えさせよ。」 28：1

出エジプト記28：1に「あなたは、イスラエル人の中から、あなたの兄弟アロンとその子、すなわち、アロンとその子のナダブとアビフ、エルアザルとイタルを、あなたのそばに近づけ、祭司としてわたしに仕えさせよ。」とあります。このように特別な働き人を任命されたのです。

(2) 「彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせる」 28：3

アロンとその息子たちはイスラエルの民を代表して神に仕える者たちでした。神に奉仕する権威をこ

の祭司たちに与えられました。これ以外にもレビ人がいたので、幕屋の移動など多くの働きがあったことは皆さんご承知のことでしょう。その中から、特別な働き人をお選びになったということです。彼らは民と神との間の仲保者と言われていて、いわゆる代理人です。そのように立てられたのです。

Ⅱ. 大祭司のための装束を作れとの神のご命令 28:2-39

1. 栄光と美を表わす聖なる装束を作れ

28:2「また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。」。人々は幕屋のときと同じように材料を持って来て言われた通りに作りました。アロンは大祭司としてこれを着たのです。2節から39節に次のようなものが作られたとあります。

(1) エポデ 6-14節

エポデのことばの意味は「着る、巻く」です。金色、青色、紫色、緋色の撚り糸とそれで織った亜麻布を用いて作るのです。前回、幕屋を造ったときになかった材料が一つ含まれています。それは最初の「金色」です。これは「神の義」を象徴しています。青色は「天」、紫色は王が着る高貴な色で「王の栄光」を表わし、緋色は「メシヤの栄光」を表わすとそのようなことを象徴して、これらが材料として使われたのです。エポデと聞くとイスラエルの民は大祭司の装束を思うというほど代表的なことばだと言われていて、

(2) 胸当て 15-30節

エポデの上に着用する胸当てです。そして、その胸当てにイスラエル民族の名前を刻んだ12の宝石をはめ込むようにと言います。それはこの大祭司がイスラエルの12部族を代表する者であることを表わしていると言われていて、そして、胸当ての内側には袋があって、そこにウリムとトンミムという占いの道具を入れます。これは「神意を問うくじ」と書かれています。「さばきの胸当て」といいますが、良い悪いをさばくのではなく、神のみこころは何かを知るための判断、指導のためのものです。「ウリム」のことばの意味は「光」です。「トンミム」は「完全」です。その二つの占いの道具をうちに入れて、神に何かの判断を仰ぐとき大祭司はそのうちの一つを取り出す、もし、ウリムが出たなら「これは神のみこころではない」、トンミムが出たら「これは神のみこころだ」というように判断するためのものでした。だから、これは「くじ」なのです。もちろん、大祭司はどちらが出るかわかりません。神だけがご存じのことです。これは形もよく分かりませんし、後代までずっと続いているものでもありません。いつの頃か早い時期にこれらは廃れていると考えられています。

(3) 青服 31-35節

青は「天」を象徴するので、キリストのご性質を表わしていると考えられます。エポデの下に着るもので、裾にはざくろの実と金の鈴を交互に着けます。これはそれを着る大祭司が死なないためであると言います。神は義であり完全な聖なる方ですから、もしも、彼らとその神の義と聖にそぐわない者であるなら、直ちに、彼らは死ななければならないということです。その警告として金の鈴、ざくろの実を交互に着けさせたというのです。

(4) 長服 39節

市松模様の長服とあります。白と黒の碁盤目模様です。

(5) かぶり物 36-39節

亜麻布で作った頭巾、ターバンをかぶります。そして、額に純金の板を付けてそこには「主への聖なるもの」と彫るように言います。これは「私、この大祭司はイスラエルのすべてのささげものに関して責任を負います。民の代表です。」ということです。そして、自分は神のために特別に選ばれた者であることを象徴しています。

(6) 飾り帯 39節

腰に締める帯、これは奉仕や働きを意味します。ルカの福音書12:37にはこのように記されています。「帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」と。旅に出ている主人が帰って来てしもべたちを呼び「主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、食事の準備をしてもてなしをします」とあります。すなわち、帯は奉仕、働きを意味していると言われます。

(7) 肩当て 7節

これはどのようにして作るのかが書かれていませんが、両肩に付けるものです。力の象徴と言われます。

このようなものが大祭司の衣装として作るように命じられ、そのように作ったのです。神はこのようにして大祭司の装束の完全なデザイナーでした。先には幕屋、聖所、至聖所と一級建築士の上をいくスーパー建築士でした。人間にはできないことがない特別な設計をされる方です。なおかつ、それをデザインされただけでなく、それを作る人を選ぶこともされたのです。

2. それを作る者 35 : 10

35 : 10に記されているように「あなたがたのうちの心に知恵のある者は、みな来て、【主】が命じられたものをすべて造らなければならない。」と、神は単に「作れ」と命じられただけでなく、それを作る者を整えられたのです。その人は「感動した者」であり「心から進んでする者」です。35 : 21「感動した者と、心から進んでする者とはみな、会見の天幕の仕事のため、また、そのすべての作業のため、また、聖なる装束のために、【主】への奉納物を持って来た。」。神の言われることは本当にすばらしいと言って感動し、そして、喜んだ、そして、それを心から「したい」と願った者、その人たちを選んだと言います。それはベツァエルとオホリアブであったと二人の名前が出て来ます(35 : 30-34)。

(1) 「彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。」(35 : 31)

(2) 「また、彼の心に人を教える力を授けられた。」(35 : 34)

(3) 「あらゆる仕事と巧みな設計をなす者として、」(35 : 35)

彼らはリーダーとして立てられたのです。しかし、リーダーはすべてのことを自分とするのではなく、神の設計に従い、また、リーダーに従い、そして、整えられた人たち、教えられた人たちが事を行なう、そのことを神はここでご計画されたのです。ここに神のすばらしいご計画とご配慮を見ることが出来ます。神はすべての点で完全なお方です。すばらしいデザイナーであり設計者である神の面を私たちは知ることができるのです。

Ⅲ. 大祭司の働きとは 出エジプト30 : 10

30 : 10「アロンは年に一度、贖罪のための、罪のためのいけにえの血によって、その角の上で贖いをする。すなわち、あなたがたは代々、年に一度このために、贖いをしなければならない。これは、【主】に対して最も聖なるものである。」。

1. 大祭司とは

(1) 名称の由来

ヘブル語の「コヘン・ガドル」ということばです。「偉大な祭司」という意味です。祭司の中でも特に偉大な存在であるから大祭司というわけです。

(2) 資格

(a) 彼が代表する人々を思いやることができる

思いやりの心をもっているのです。

(b) 神によって任命されている

(c) レビ人であるアロンの子孫であること

これが人である大祭司の資格であり、また、名前でした。

3. その任務 : 罪のためにささげものといけにえをささげる

ヘブル5 : 1「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事らについて人々に代わる者として、任命を受けたのです。それは、罪のために、ささげ物といけにえとをささげるためです。」

(a) 聖所での奉仕

造られた幕屋の中の聖所です。普通の祭司は聖所の中しか入れません。大祭司だけが至聖所に入ることができます。

(b) 民に律法を教える

神がモーセを通してイスラエルの民に与えられた律法の一つ一つがどのようなものであるかを教えるのです。

(c) 民のためにウリムとトンミムで神の御旨を問う

先ほど説明したように、神のみこころは何かということをも民に代わってその神意を問うという働きをするのです。

レビ記16 : 1-4を見てください。「:1 アロンのふたりの子の死後、すなわち、彼らが【主】の前に近づいてそのために死んで後、【主】はモーセに告げられた。:2 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない、死ぬことのないためである。わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。:3 アロンは次のようにして聖所に入らなければならない。罪のためのいけにえとして若い雄牛、また全焼のいけにえとして雄羊を携え、:4 聖なる亜麻布の長服を着、亜麻布のももひきをはき、亜麻布の飾り帯を締め、亜麻布のかぶり物をかぶらなければならない。これらが聖なる装束であって、彼はからだに水を浴び、それらを着ける。」

アロンが聖所に入るときは栄光の装束を着けてはいけなと言われていています。普通の祭司のように亜麻布の長服を着るようと言います。1節には「アロンのふたりの子の死後、」と書かれています。アロンと四人の子どもたちが祭司として任命されたのですが、ここでは二人の子どもが死んでいることが分かります。その後「すなわち、彼らが【主】の前に近づいてそのために死んで後、」とあります。神のため

に働くために召された彼らですが、2節に「【主】はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない、」とあり、彼らはそのような行動をしたことが分かります。

そして、『贖いのふた』、これは至聖所の中に契約の箱があってその上に「贖いのふた」がかぶせられています。両側にケルビムがそれを守っています。大祭司が至聖所に入ったとき神がその贖いのふたの上に臨在されるということです。その贖いのふたの前に行ってはならないと言われたのです。神は「わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。」と言われました。

アロンの二人の子どもたちはいったいどうして死ぬことになったのか？レビ記10：1-2を見ると「さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのおの自分の火皿を取り、その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を【主】の前にささげた。：2すると、【主】の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは【主】の前で死んだ。」とあります。自分の火皿を取ってその中に火を入れ、その上に香を盛って、「主が彼らに命じなかった異なった火を【主】の前にささげた。」からです。神の怒りの炎によって焼き尽くされたのです。彼らは神の義と聖を汚したのです。そのゆえに、この二人の子どもたちはいのちを絶たれたのです。だから「かつてなときに入ってはならない」と言われたのです。

神は次のような厳密なルールを設定されました。

- (1) 年に一度だけ、贖罪の日（7月10日）に。
- (2) 贖いによってイスラエルの全会衆が神との交わりに入れられる。
- (3) 大祭司だけが至聖所に入ることができる。

ヘブル9：6、7には「さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつも入って礼拝を行うのですが、：7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。」と書かれています。第二の幕屋とは至聖所のことです。しかし、先ほども言ったように、大祭司はあの栄光の装束を着て入ることはできなかつたのです。彼らは確かに神からその装束をいただきましたが、それは人々から見たときに神の栄光を示すためのものであって、神の前に立つときにその衣装は自分の栄光を現わすものではなかつたのです。だから、その服を着替えて、白い亜麻布の長服を着たのです。これは神の前でのへりくだり、謙遜です。

なおかつ、自分のためにいけにえをほふらなければならなかつた。そして、人々が知らないで犯した罪のためにもそのようにしました。知っていて犯した罪については神は民をさばかれます。先ほどのアロンの二人の子どもたちのようにすぐにいのちが絶たれるという、非常に厳しい状況にイスラエルの民は置かれていたのです。

年に一度、贖罪の日があります。7月10日です。このときに初めて、イスラエルの民は大祭司の執り成しによって自分たちの罪を赦していただけるのです。出エジプト19：5-6に「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。：6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」とあります。神はモーセにこのように言われました。「まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、」と、これが旧約の時代においてイスラエルの民に対してなされた神の契約です。そうするなら、「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」、「祭司の王国」とは国民のすべてが祭司ということです。だから、イスラエル民族のひとり一人が祭司となって神に仕える、そのような王国を形成すると言います。だから、イスラエルの民は「わたしの宝となる。」と神は言われたのです。これがイスラエル民族が「選びの民」と言われる所以なのです。

さて、新約聖書で私たちはどのようなことを学ぶことができるのでしょうか？

IV. 新約聖書の説き明かし（ヘブル書）

新約聖書には大祭司について次のように記されています。ヘブル書には多くの箇所「大祭司」ということばが出て来ます。10：1-4「：1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。：2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかつたはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずで。：3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。：4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」、神の宝物、選ばれた聖なる祭司とイスラエルの民はそうに言われましたが、実は、年ごとに彼らはその罪を神によって赦していただく必要があつたのです。でも、それは影であつて実物ではないと言います。「後に来るすばらしいもの」が実物なのです。その行為はただただ自分の罪を思い起こすものであつて、罪を取り除くことはできないのです。そのように書かれています。なぜなら、彼らのささげ

物は罪を覆うだけですから、罪が完全に聖くされたわけではないからです。もし、彼らが自分は完全に聖い者だと思っているなら、次にささげ物を持っていく必要はなかったのですが、彼らは日ごとに年ごとに犠牲の動物を連れて来て、祭司なり大祭司なりに執り成しをしていただく必要があり、彼らはそのように思っていたのです。自分たちの罪を思い起こさせるためのものであったと、この箇所は私たちに教えているのです。

1. イエス・キリストは真の大祭司である

A. アロンのような大祭司

5 : 4 「まただれでも、この名譽は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。」、ここで注意したいのは「アロンのように」と書かれていることです。アロンに似ているけれどアロンではないのです。アロンのような大祭司として神に召されていると言うのです。先ほども見たように、アロンは大祭司であってもささげ物をささげるときに聖なる装束を着て神の前に立つことはできなかつたのです。なおかつ、聖所に入る前には水で自分のからだを洗わなければいけなかつた。彼は贖罪の日に至聖所に入り、罪のためのささげ物の血を「贖いのふた」の上に、前に注ぎかけました。最初は自分のために、次はイスラエルの民の罪のためです。それは彼に彼らに罪があるからです。犠牲の動物が必要であったのです。だから、ここに「アロンのように」と記されているのはアロンと同じではないということです。

B. メルキゼデクの位に等しい大祭司

5 : 8 - 10 にこのように記されています。「:8 キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、:9 完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、:10 神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司となえられたのです。」、キリストは神であられるのに神であることに固執されなくて、人のからだを取ってこの地上に来てくださった。死に至るまで従順であったと私たちは聖書から教えられています。「多くの苦しみによって従順を学び、」とありますが、イエス・キリストは神だから苦しみに会うはずはないし、また、苦しまれても平気ではないかと私たちは思いがちですが、決してそうではないということはみことばに記されている通りです。イエスはこの地上にあって公の生涯を送られたときに多くの苦しみを受けられました。迫害があり、自分は神であると言ったために祭司長や律法学者たちの陰謀によって「神を冒瀆する」と言っているのを狙われたのです。むちを打たれたこともありました。私たちが味わうすべての苦しみ以上の苦しみに会われたということです。イエスが不従順であったという意味では決してありません。

イエスは父なる神のみこころに従ってすべての行ないをされたのです。父が命じられたことを子なる神であるわたしが行なうということです。また、わたしを見たのは父を見たと言われました。イエス・キリストを見るなら、神がどのようなお方であるかをあなたがたは知ることができるということです。そして、イエス・キリストに従うすべて人々に永遠の救いを与えるものとなった、だから、神によってメルキゼデクの位に等しい大祭司とされたと言うのです。

◎メルキゼデク

ヘブル7 : 1 - 3 に彼がどのような人物であったかが記されています。「:1 このメルキゼデクは、サレムの王で、すぐれて高い神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。:2 またアブラハムは彼に、すべての戦利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。:3 父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。」とあります。

(1) 名前の意味：義の王

(2) サレム（平和）の王

平和であり義なる方、私たちはイザヤ書9 : 6 - 7 からこのお方を思い起こすことができます。「:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」、イエス・キリストは「平和の君」と呼ばれる。」、そして、「ダビデの王座に着いて、その王国を治め、」と、イザヤはやがて来たるべき方はこのような方として来られると預言したのです。また、

(3) 父も母もなく、系図もなく、生涯の初めもいのちの終わりもない

人間ですから当然ありますが、聖書はこのように表現して記していないのです。メルキゼデクのことは創世記14章に書かれています。ヨルダン川の東に4人の王の連合軍があり、そこからこの連合軍はカナンの地の5人の王の連合軍に戦いを仕掛けて来るのです。4人の王が勝ちます。そして、戦利品としてすべてのものを奪い去るのですが、ご承知のように、アブラハムのおいの口はソドムに住んでい

たので、ロトとその財産も奪われました。そのことを知ったアブラハムはそれを取り返しに行きます。戦いを仕掛けて敵を打ち破りロトを連れ帰り、奪われた財産もすべて持ち帰って来ました。それを見たシャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来て、アブラハムを祝福するのです。アブラハムは財産の十分の一をささげました。よく献金はどれ位するのですか？と聞かれます。ある人は十分の一、いや今は新約の時代だから十分の一以上だ、それは旧約のことでしょうと。私たちが献金についてみことばから教えられたことは、各自が決めた通りにしなさい、強いられてではなく惜しむ心でなく、喜んですることでした。ここでの十分の一は「私は今あなたに十分の一をおささげしますが、残りの十分の九もすべてあなたのものです。」ということの意味しているのです。すなわち、アブラハムは王であり祭司であるメルキゼデクに「私はあなたの臣下です。だから、すべてはあなたのものです。」と恭順の意を示したのです。これがアブラハムがメルキゼデクに対して取った行為です。

(4) すぐれて高い神の祭司

イエス・キリストはこのメルキゼデクの位に等しい大祭司としてここに記されているということです。メルキゼデクは人間でしたが、イエス・キリストは人となって来られた神です。そのことをここで教えられます。

(5) 神の子に似た者

これはキリストの型です。

C. そのお働きとは？

(1) あわれみ深い忠実な大祭司

ヘブル2：17-18にそのように記されています。「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。：18 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。」、同じ苦しみを受けている兄弟たちを助けることができると言います。私たちはイエス・キリストが神の子であるにも関わらず、多くの苦しみを受けてそのご生涯を終えられたことをよく知っています。あるときはいのちの危機にさらされ、あるときはむち打たれ、また、十字架においては私たちの罪のために身代わりとなって死ななければならなかった。イエスは自ら進んで十字架に架かれたのですが、その中にもイエスは「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と言われました。イエスは神の子なのに神に文句を言うのですか？決してそのようなことはありません。イエスは全く罪のない方でしたが、たとえ、私たちの身代わりとはいえ、その罪を負って死なれることは非常な苦しみであったと私たちは見ます。謂れのない罪です。私たちにも経験がありますが、私たちは不完全な人間です。たとえ、救われていても罪が100%クリーンにされたわけではありません。なぜなら、私たちは神を信じていても罪を犯すからです。それはしてはいけないと言われる罪かもしれない、あるいは、私たちの心ではこうあるべきと思うのに実際にできないということかもしれません。毎週、講壇から語られるみことばは私たちの心を刺します。まさに、みことばは剣です。なぜなら、私たちはできないからです。みことばの命じることを100%できるなら、私たちは胸を張って神の前に立つことができます。

でも、大祭司のアロンにしてもそれは無理だったのです。アロンの子どもたちも罪を犯しましたが、それは神がしてはいけないといわれたことをしました。これは大事なことです。私たちもいろいろな罪を犯しますが、私たちを助けるために聖霊の内住があります。イエスは自らそのような苦しみを経験された、だから、苦しむ私たちは大祭司であるイエスに執り成しを願うのです。先ほど「この人を見よ。」と賛美しました。この人、イエス・キリストを見よ。私たちの信仰はキリスト教を信じることではなくイエス・キリストご自身を信じることにあります。この方はどのようなお方であるかを信じるのが大切なことです。

(2) 偉大な大祭司である神の子キリスト

メルキゼデクは「神の子のような」でしたが、イエス・キリストは「神の子」ですから全く違います。ヘブル4：14-15に「さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。：15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」とある通りです。

(3) メルキゼデクの位に等しい大祭司

Ⅳ. の1. Bで見た通りです。

(4) 永遠に祭司

アロンは亡くなります。そうするとその後を四人の息子のうち残された二人のうちの一人が継いでいきます。次々に継いでいくのです。だから、系図があります。イエス・キリストには系図がありません

んから、永遠に大祭司です。初めも終わりも大祭司ということです。ヘブル7：21に「——彼らの場合は、誓いなしに祭司となるのですが、主の場合には、主に対して次のように言われた方の誓いがあります。「主は誓ってこう言われ、みこころを変えられることはない。『あなたはとこしえに祭司である。』」——と記されています。」と記されている通りです。

(5) 天よりも高くされた大祭司

ヘブル7：26に「また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。」と書かれています。このイエス・キリストがおられるから私たちは罪深い信仰生活を赦していただくことができるのです。大祭司であるイエス・キリストがすでに私たちの罪を背負って十字架に架かって死んでくださったから、すべてが完了したのです。

(6) 天におられる大能者の御座の右に着座され、真実の幕屋である聖所で仕えられている

ヘブル8：1「以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、」

(7) 永遠の贖いを成し遂げられた

これは大事なところなのでヘブル10：10-12を見ましょう。「10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。11 また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、」ただ一度だけご自身をささげられたと言います。完全ないけにえがイエス・キリストでした。なぜなら、あのバプテスマのヨハネが言ったようにイエス・キリストは「神の小羊」そのものだからです。何の傷もしみもないいけにえがイエス・キリストでした。だから、それ以上のいけにえをささげる必要はないと聖書は教えているのです。人間の祭司がささげるいけにえは決して罪を除き去ることはできないと書かれている通りです。

2. イエス・キリストを信じた者は王である祭司となる

I ペテロ2：9a「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。」

A. 私たち救われた者は

(1) 選ばれた種族

イスラエル民族はそうでした。「選民」と言います。今、私たちは神によって選ばれた民です。

(2) 王である祭司

メルキゼデクのように、王であって祭司です。

(3) 聖なる国民

選び分かたれた国民です。イスラエルの民はそうでした。

(4) 神の所有とされた民

神の持ち物となったのです。「贖い」とは簡単に言うなら「代価を払って買い取る」ということです。イエス・キリストという完全ないけにえを代価として払って、私たちは神のものとして買い取られたのです。イエス・キリストだから完全なのです。

私たちは霊的イスラエルと言われます。神に仕える者として神の前に働くべき者です。イスラエルの民はそのような者でしたが、古い「契約を守るなら…」と言われていました。私たちは契約を守ってそのような者になるのではなく、ただ、イエス・キリストが贖ってくださったから、神の恵みによって救われるということです。私たちは良い行ないによって救われるのではありません。どのような方法をもって私たちの力で救われることはないのです。イエス・キリストが私たちの救い主であるから、イエス・キリストを信じることによって救われると私たちははっきりと教えられているから、そのことを伝えるのです。

B. 大祭司であるキリストのすばらしいみわざを宣べ伝えるために生かされている

救われた私たちの働きを考えてみましょう。パウロはこのように言いました。ローマ12：1「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」、これが礼拝だと言います。毎週、私たちはここで礼拝をしていますが、真剣にそのときを過ごしているかどうかを考えなければいけません。

そして、I ペテロ2：9b「それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」、この「みわざ」は複数形で「賛美、徳、すばらしさ、栄光」を意味します。大祭司の服装は神の栄光を表わすものでした。私たちは神のみわざを伝えるのです。私たちはことばだけでなく行ない通しても、多くのまだイエス・キリストを知ら

ない方々に、イエス・キリストはどのようなお方か、神はどのようなお方か、神を信じている私たちはこのように変えられているということを証するために遣わされるのです。

「えっ、あなたはクリスチャン？本当に？」でなく「やはり、そうだったの、クリスチャンだったの…」と言われるように、このような大きな任務を託されていることを覚えて、この一週間も歩んでいただきたいと思います。